

マニ教的暴力をめぐる思想的布置

——ニーチェ主義の問題性を軸芯に据えて

清 眞人（近畿大学文芸学部教員）

武藤一羊氏と渡辺憲正氏はそれぞれ現代社会の動向を件のテーマから政治的ならびに社会科学的な視点から論じると思うので、私は 20 世紀から現代にかけて主に西欧の哲学思想——とりわけて実存的思考の系譜に立つ——のなかで暴力というテーマがどのような思想的布置の下で論じられてきたのかを振り返ることをしたい。その際中心軸に座るのは「ニーチェ主義」に対してどういう位置関係に立つのかという問題である。

I イジメ経験に関する二人の学生のレポートから

当日、二つのレポート（いずれも近畿大学学生が書いたイジメ経験に関する）を配布する。ここでは省略するが、それをまず考察の手掛かりにしたい。二つの理由からである。第一に、私のここでの考察は次の問題連関を 20 世紀の思想がどのように主題化してきたのかという点を焦点にするものである。すなわち、いわゆる「構造的暴力」をその下における人間が己のうちに内面化し、今度はそれをいわば「暴力への意志」として再外面化することによって自己を「暴力の主体」へと自己形成する際、そこにどんな論理が働くのか？ この問題をどんな風にわれわれは反省的自覚に変えてきたのか？ という問題連関¹。第二に、今日の日本における「イジメ」問題をグローバリゼーションという「構造的暴力」の日本における内面化の独自の現象形態としても読み解くという視点（本報告で論じるわけではないが）を背景に置きたいからである。

その考察にあたって、あらかじめ「自己経験」とそこから生まれる「パースペクティブ」との関連に関するニーチェ思想の本質的要素²を当日少し振り返る予定である。というのも、それらの要素はわれわれの問題にとってきわめて示唆的であるからだ。中心問題は二つある。ルサンチマン的暴力の問題構造としての敗北的従属と復讐的攻撃性とのアンビヴァレントな一体性という問題と、ルサンチマン的苦境がいつそう深化するならば、自殺という決定的敗北を回避する手段は世界の想像的転換——サルトルが「審美主義的世界転換」と定義した問題、「生きることが不可能な状況を生きうるものへと転換するために、非現実性（想像的なもの）を現実化することをもって現実性を非現実化する」という問題である。この問題性はイジメ経験から今日のテロリスト的心性の問題構造まで一貫して貫く問題である。しかも、それは 20 世紀の開始点において西欧知識人において極めて重要な思想問題（「哲学となったテロリズム」アーレント）となったものであるが、晩年のボードリヤール

¹ サルトルにあつてこの問いがどう追求されたかは、拙著『実存と暴力——後期サルトル思想の復権』（御茶の水書房、2004年）第三章「暴力論としての『弁証法的理性批判』」参照

² 参照、拙著『《想像的人間》としてのニーチェ——実存分析的読解』（晃洋書房、2005年）

の主張した「状況の詩的転覆」——世界のヴァーチャルの全体化が必然的に生み出す「裏市場」的な「ラディカルな無用性」たる諸情動の「異常な諸形態」、これにフェティッシュに固着することによって構成される「特異性」をシステムを動揺させるいわばテロリズムの梃子とする——という戦略（『不可能な交換』）はこのテロリスト的世界態度の焼き直しである。

II マニ教的暴力の他性構造

サルトルの『弁証法的理性批判』における暴力論、暴力に必然的に伴う自己正当化をはかる自己表象の論理を「他性」（《悪》の《他者》たる善なる我）のマニ教的な<敵>形成論理に見出した見地は、実はニーチェのルサンチマン暴力についての洞察をまっすぐに継承するものである。当日『弁証法的理性批判』におけるサルトルの暴力論の核心をなすテーゼと『道徳の系譜』でのニーチェのルサンチマン暴力のマニ教的心性を暴く一節との論理の驚くほどの一致を示すつもりである。

ところで、サルトルは、暴力の成立論理そのものであるマニ教的な相互性切断に対抗して相互性の絶えざる回復という倫理的実践の立場を対置した。ニーチェは、病者の視点と健康者の視点とを往復できる自分の能力を誇示したが、この点でまさしくルサンチマン暴力のマニ教的病理を鋭く見抜いたにしろ、彼の反・相互性の「単独者」主義はサルトル的＝レヴィナス的な「他者性の倫理」に彼を導くものでは到底なかった。最近のジュディス・バトラーの反マニ教的普遍主義の立場は本質的にサルトルと同一であるとともに、「傷つきやすさ vulnerability」という感受性をこの倫理遂行の土台に据える点でレヴィナスを継承している。この彼女の立場は、レヴィナスと同様生の本質にたんにニーチェ的な男性主義的で所有主義的な「力への意志」を見るだけでなく、それに対抗する生の本質をなすもう一つの要素として母性主義的な感受性としてこの「傷つきやすさ」を評価するものでもある。

III ブーバー的源泉、あるいは 20 世紀精神史の隠れたる震央

マニ教的暴力をめぐるニーチェとサルトルとのあいだに存する対立はレヴィナスを経由して「私 - きみ」の対話と共生の哲学を提唱したマルティン・ブーバーの存在を、20 世紀実存思想の——ハイデガーと並ぶ——もう一つの震央として指し示す。

IV 相互性と他者性

以上の論述の手順を踏んだうえで、最後に、晩年のボードリヤールの問題提起を批判的に検討したい。現実のヴァーチャル化それ自体の暴力性という彼の鋭利な問題提起がどこでなぜテロリスト的袋小路に陥って不毛化するのか、それを抉り出したいと考える。